新しい日本画を求めて

斉藤　典彦さん（高28回）

インタビュアー　平岡美恵子（高2回）
美濃本小夜子（高18回）
鈴木恵美子（高25回）
小川範子（高25回）

東京芸術大学在学中に創画展に入選。一九八九年に第10回山種美術館賞展で優秀賞を受賞。

又、一九九五年から九六年には文化庁派遣芸術家在外研修員としてイギリス・ロンドンに留学。

近年では日経日本画大賞展に連続で入選するなど、現代日本画の新たな旗手として注目を浴びています。

そんな斉藤さんが、生まれ育った平塚の『市美術館』で“斉藤典彦展　きもちよくながれる！”（7月27日～9月24日）を開催。暑さの残る9月23日（日）美術館内のレストランにてお話を伺いました。

―絵を拝見させていただきました。今までの日本画には無い手法だそうですね。木片を使っている絵がありますね。でも、違和感もなく、とてもよい感じですね。

「ええそうですね。いろいろな材料を使って表現します。描く画材は和紙や絹、板などいろいろ使います。和紙などは、そのままだと書道の紙のように滲みますので、膠を使ったりするんですが、そうすると絵の具が、上に乗っていく感じになるんです。油絵とは又違った粉っぽい感じになります。」

―具体的な感じから抽象的な絵へと移っていっていますね。

MORI O OMOU-3　(1991)

「ええ、高校の美術部の頃や、大学の学部の頃は、もっぱら風景など形のあるものを描いていましたね。

それと、高校の美術部や受検の頃というのは、一般的には油絵を描く人が多いんですが、僕は油絵のあの絵の具の臭いや、粘り気が好きになれなくて、西野先生に許しをもらって、美術の時間にも一人だけ水彩絵の具を使っていましたね。」

―絵の方向にと決めたのはいつ頃ですか？

「中学の頃から、サラリーマンよりは研究者のような一人でやる仕事の方が向いているんじゃないかと思っていました。

中学の時の部活は陸上部だったんですよ。

ただ、絵を描くことは好きだったし、母も絵が好きで、家にピカソやセザンヌなどの画集がありましたので、小さい頃からよく見ていました。

それと、浮世絵など日本の古いものも好きでしたね。こちらは書道家だった祖父の影響でしょうか。

洋画でも『岸田劉生』の様に日本的な表現をしている方が好きでしたね。そんなことからでしょうか、だんだん日本画の方に行きました。

大学に入って初めて『岩絵の具』を使うようになるのですが、パウダー状でざらざらしているので、光が乱反射して白っぽくなり、やわらかい雰囲気になるんです。現代的な色合いにならないので、かえって落ち着いた感じになりますね。

もともと昔の『岩絵の具』は銅の化合物で、綺麗な天然の石を砕いてざらざらの砂状から、だんだん細かくしてパウダー状にしていきます。が、天然の石が少なくなり貴重になってきて、最近では七宝の絵の具に近いんですが、ガラスの中に金属を加え溶かして色を出し、その後固めたものを砕いて絵の具にしています。それでいろいろな色が作れるようになってきました。

この個展の期間中の8月に、子供達を対象にこの会場で＝岩絵の具と触れあってみる＝という体験コーナーを企画したんです。

岩絵の具を使って『うちわ』を作ってもらったんですが、描くというより、流すという感じですね。普通の水彩絵の具ではそんな風にできませんから。結構楽しめたみたいでしたよ。」

―ところで、現役で合格されたんですよね。受験勉強はどんな風に？

「僕はあまりやらなかったですよ。運がよかったんですね（笑）。

夏休みや冬休みには予備校の講習会に行きました。

それと、日本画科を卒業された江南の先輩（女性ですが）が大磯にいらしたので、毎週伺って教えていただきました。」

―現在も平塚ですか？

Shaman　Moon　(1989) の前で

「ええ、ずっと平塚です。住まいの近くにアトリエがあります。

週に3～4日大学（芸大）で常勤で教えています。こちらが本業です（笑）。

学校に行かない時は描いているんですが、若い頃は、会に入選したり賞をとったりすることに意欲を燃やしたりで、年をとってきたのか、そういうことはどうでもよくなって、自分のやりたいことが表現できればいいかなと思えるようになってきましたね。

他人に評価されることより自分の中での実績の積み重ね。

この年になると、自分にできること、できないことがイヤでも見えてきますからね。」

―来年の活動は？

「年一回位は、個展を開いています。銀座のギャラリーが多いんですが。

3月末に芸大日本画研究室の展覧会が日本橋三越であるので参加し、同じ頃、ニューヨークの画廊でのグループ展にも出品します。」

―高校時代の思い出は？

「国立3教科受験の最後の入試でしたね。何しろ学科は不得意でしたから、特に理科系は（笑）。」

―印象に残る先生は？

「西野先生はもちろんですが、国語の宮本先生、それと化学の壁山先生ですね。化学ができなかったですから怒られてましたね。でも、それなりに思い出に残っています。歴史や国語は好きでしたよ。」

―最後に一言お願いします。

「そうですね。自分を信じてやるのが一番だと思いますね。

自分で決めて結論を受け止める。そして判断する。そうやって進んで行ってほしいですね。」

今日はお忙しい中を有難うございました。

どうかこれからもご活躍ください。

江南高校の今

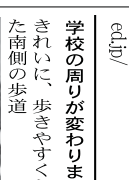
今年度は、二つの大きな行事がありました。

一つは、7月19日（木）に、4日遅れで開催された、体育祭です。仮装も立て看板にも力が入り、暑くて熱い一日となりました。

生き生きと高校生活を送っている江南生。行事を通して笑い、涙し、困難を乗り越えた充実感を知っているからでしょうか。

そんな現役生は、部活動や委員会活動にも、生き生きとした姿を見せてくれています。

文化部の活動は、うれしい結果を届けてくれました。放送委員会の澤恵里香さんは、NHK杯全国高校放送コンテスト、全国大会朗読部門に出場しました。出場者250名、惜しくも準決勝進出は逃しましたが、審査員からは、「発声、発音が良く、聞き取り易い声、よく内容や状況がつかめていた。」と評価されました。



澤　恵里香さん

全国高校総合文化祭が島根県で開催されました。弦楽部員11名が神奈川県合同オーケストラとして出演し、競技かるた部は小倉百人一首かるた部門で団体3位に入賞しました。

◆卓球部関東大会へ

関東高等学校新人卓球大会（団体）に卓球部女子が出場しました。現3年生の安田彩乃が1年の時、たった一人の女子部員でがんばり通し、その後、力ある後輩たちを迎え、今年のインターハイ県予選でベスト8のシードを獲得。そして、この新人戦。5位から8位のリーグ戦の接戦を制して全勝。5位となり関東大会出場を決めました。メンバーは7名。選手は、2年生3名（石塚清乃、日下部由紀、三田真理子）、1年生4名（篠崎瑞貴、丸岡奈穂、荒木萌実、渡辺美優）。大磯、江陽中時代の関東出場経験とともに、練習を工夫して努力しました。

本大会は埼玉県春日部。来年のインターハイ会場。Aブロックでのリーグ戦3試合。結果はｖｓ真岡女子（栃木）0―3、ｖｓ大多喜（千葉）1―3、ｖｓ鉾田二高（茨城）1―3。負けはしましたがかけがえのない経験をさせて頂きました。出場に際して、同窓会、卓球部ＯＢに支援を頂きました。ありがとうございました。

「滝」のこと

中庭の築山に滝の水音が聞こえるようになりました。

池の修復後、金魚を住まわせましたが、溜り水に魚は適応できず、多くの犠牲をはらいました。水を腐らせないために水を動かし同時に浄化することを考え、水中ポンプで循環式の池水としたのです。

滝から池までの数メートルの流れが静かな時はせせらぎの音を奏でます。

学校の周りが変わります！

きれいに、歩きやすくなった南側の歩道

東側は工事中ですが、正門と共に美しく変身します。

物理部無線班、囲碁将棋部も全国大会出場を果たしています。

運動部では、関東大会出場の卓球部、山岳部、陸上部を筆頭に、各大会で大いに健闘しています。毎日の練習をひたむきに熟し、励んで次の大会に臨み、納得のゆく結果を出してください。期待しています。

在校生の多方面にわたる活躍は同窓会員にとって大変嬉しいものです。多くの同窓会員の方々に、江南高校の今の様子、生徒の活動、学習への取り組みなどを知っていただき、応援してほしいと思います。

江南高校のホームページがありますので、是非アクセスしてください。

http://www.hiratsuka-konan-hpen-kanagawa.ed.jp/

同窓会開催の詳細にご注意！

記載した通知が出されています。振込みの際には確認するように、お気を付け下さい。

倉庫・運輸業
湘南旭商事㈱
平塚市真土西真土3-9-28
TEL.0463-54-5966
柳川貞夫（高5回）

スクール生募集
豊かな自然環境とアットホームなクラブ
日本テニス協会公認
HIRATSUKA
湘南平テニスクラブ
平塚市万田549
TEL.0463-33-9969

快適な老後と、自立した生活環境を提供します
経費老人ホーム
ケアハウス湘南の里
平塚市万田939
TEL.0463-30-3100

今を頑張るお母様と、子どもの成長を応援します
社会福祉法人　真幸会
真土すばる保育園
平塚市西真土3-22-39
TEL.0463-53-4141

真壁佐一（高19回）・真壁洋道（高45回）・真壁美穂（高49回）